二学期の保育の実際

幼児の仲間あそびの指導

松井円戒

はじめに

二学期をむかえた子どもたちは、それぞれに一段と成長をみせ、動きがぐんと活発になって、あそびの内容も深まり、友だち関係も一人あそびの域を脱して、「仲の良い友だちがほしい」「友だちといっしょにあそびたい」と要求も深まってまいります。抵抗なしに集団にスムーズに入っていく子、集団に入るテンポのおそい子、腕力をもって他を制する子、いやいやながらについていく子、ボス的存在の子、限られた友だちとしかあそべない子など、集団としてのいろいろな問題が頭をもたげてきます。

われわれ保育者は、いつも子どもたちといっしょになってあそびながら、ひとりひとりの子どもに目をむけてその実態を捉え、時には話し合ったり考えたりして、友だちと協力しあうことの重要さや、意義をよく知らせて理解させ、それらの態度が身についていろいろな友だちと接し、ひろがりを作り、深まりを濃くするように、ひとりひとりの幼児から、クラス全体、園全体が活発に動くようにくふうしたいものです。そのために私の園では先生が作った計画の方へ子どもを引張りつけるのでなく、先生が子どもの生活へうまく適応していくような方法をとっています。

生活を教育へ引張ったのでなく、生活そのままへ教育をもっていくというところに大きな効果を感じさせられるのであって、組、室、先生、時間というわくに縛られることなく全部を開放し、多角的に流れているようすや、目的生活をよく見あやまらず、流

れをつかみ、適当な形態で幼児の興味や欲求を満足させることができるように、全教師の和をもって当たっています。

次に二つの具体例について述べてみます。

実践例A　自然発生の仲間あそび

十月中旬お天気が良かったので、お弁当を持って幼児の足で一時間足らずの郊外にある向山へ、園外保育に行った次の日の朝のことである。仲良しのAとBが、砂場で何か話し合いながら、大きなスコップで山を作っている。

教師「大きな山ができているのね」と話しかけると、A「これはきのう行った向山で」B「先生C君きとる？　きたら僕らが砂場で向山を作りょうることをいうて、ここへくるようにいうてよ」といいながら、山作りにいっしょうけんめいである。

「先生もその隣にあった山を作ろう」と少し離れたところへ、作りかけると、そばで見ていたEとDが共鳴して、「先生、手伝ってあげるから、A君たちの山に、負けんように大きいのをしょうや」と急ピッチの山作りが始まった。「先生らに負けるもんか、もっと大きくするぞ」とA、Bたちもはりきって、両方が競争で、どんどん二つの山が大きくなっていった。

途中、「よせて」と入って来る子、「負けるな」とスコップを持って来る子、また、「早く手伝ってよ、先生の方が負けそうなのよ」と消極的なN男、M子にさそいかけて、参加させたり、「わー、大きい山か、僕もしよう」と入って来る子、いつも先生とあそびたがる女の子の加勢などで、どちらも五、六人のグループができて、一致協力しての山つくりに、砂場は活気づいた。

子どもの背丈ほどの大きな山ができ上がり、スコップでたたいたり、小さい積木をもって来て、石段を作り出すなど、おたがいに充実した山ができ上がった。「おい、橋をかけてつなごう」と一人の発言でみんな協力して、ビニールパイプの長いのを持ち出してくる子、橋げたに積木をえらんでくる子、各自が創意をこらして、橋作りにけんめいとなる。「下からの道もつくろうや」と道作り、歩道、高速道路まで砂場全体へと広がっていった。

いつもおとなしいT子、S子の二人がずっと離れたところで小さな山を作っていた。

この山へも大きい山から道路が、何の抵抗もなく開通していった。三つの山のグループは、自然に一体となって山あり、川あり、海あり野原ありと発展していった。「先生、僕ら机を出してくるから、早く紙やクレヨンを持って来て、自動車や人間を通ら

せてあげるんじゃから」とさいそくして、それにとりかかる子どもや、園庭の隅の草を取ってきて、山に植える子どもなど、それぞれの場において、自分の創造力をけんめいに表現して、大きなパノラマができあがった。

これは、興味のある、A、Bが、中心となって自分たちで、あそびを生み出し、考え出したものであって、決して教師が強制したものではありません。教師も仲間の一員となって、行動を共にしたり、仲間づくりに協力したりすることは、もちろんですが、時には、適切な助言を与える必要があります。このあそびが、このように発展し、仲間のつながりが深まっていったことは、教師が幼児一人一人をよく見つめて、おのおのの持つ能力を、十分に発揮できるように、配慮したためと思います。

実践例B　教師が意図した仲間あそび

口数が少なく特に集団に対して、自分の欲求を言葉でうまく表現できない子、またいつも限られた友だちとしかあそべないような子ども十人ぐらいを、他のグループのあそびの邪魔にならないように、意図的に小さい保育室に誘う。

（子どもが最も興味を持っている生き物、秋のいろいろな虫、バッタ、コオロギ等を用意しておく）

教師「みんなここへ来てごらん、いろいろな虫がいるよ、見たことがある？」「ある」と小さい声でやっと答えたA子、ただ、だまってうなずくT子、ニヤッと笑って教師の顔を見る子、教師「どこで見たの」A子「お兄ちゃんがつかまえて来たん」教師が「誰々ちゃんは」「誰々ちゃんは」と指名して聞くとやっと答える程度だ。この場合幼児たちは、何をするのか、何が始まるのかと、ある程度の不安を持っていると思うので、この場では虫についての話し合いはなるべくさけるようにした。

教師「きょうはね、この虫たちが、みんなといっしょにあそびたい、あそびたいといっているのよ、かわいがってあそんであげてね」と虫を一匹出して、とばしたり、手のひらにのせたり、また子どもにも持たせたりして危険のないことをよく知らせた後、全部の虫を放し、教師「さあ虫さんがたくさん出たよ、いっしょにあそびましょう」と教師も子どもといっしょになってあそんだ。

その中で、あまり口を開かないM子も、思わず「アッ、とんだ!!」という。ほかの子も「はやいなあ」「よくとぶなあ」「アッうんこした」などと口々に発言している。また動作の遅いN男も

次から次へと虫を追いまわして、日頃は見られない状態が見受けられた。頃を見計らって教師は、そっとあそびから抜け出し子ども同士のあそびに任せてみた。

（これは教師を意識せず子ども同士の活動、ふれ合いを深めたいためであって、放任しておくのではなく、子どもの活動のようすには絶えず気をくばり、必要な時に手助けをすることはいうまでもないことである）

ひとしきりあそんだ後「虫さんありがとう、またあそぼうね」とみんなで園庭の草原へ放してやった。

このように、教師が意図した仲間あそびはこの場だけで終わるのでなくして、材料や友だちなどをかえ、いろいろな機会を与えて、あそびをとおして自分の能力をたしかめ、自信をもたせて、仲間あそびへのきっかけを作り、さらに自分から意欲的に仲間入りができるように指導していかなければなりません。

まとめ

実践例としてあげたあそびのように、幼児が自発的に生み出したグループと、教師が意図的に組合わせたグループとがあります。前者には、興味を同じくしたもの、材料によるもの、人間関係によるものなど、あそびが活発で、かつ発展的です。しかし、腕力の強い子、リーダーなどの問題点に留意しながら、幼児の真のあそびが発展され、欲求満足できるよう、教育的にもっとも適切な助言、配慮が必要です。

後者は幼児一人一人の生活を見つめた時に自発的活動だけにかたよらず、人工的に、意図的に、能力、性格、生活経験、趣味などの優れたもの、劣ったもの、交わったもの、いろいろな組合わせによるグループ作りをして、バランスのとれた生活経験をさせることは、もっとも重要なことです。

この面においては、題材、興味付け、材料、教師の保育技術の点などが、重大な問題点となることです。学級全体で行なう経験や活動の場合も、このことがいえると思います。

幼児一人一人を見まもり、自然の流れを、よく見きわめて、欲求が満足されるよう教師の経験をいかし、適切な方法によって幼児の経験を充実、発展させ、社会的に人間関係を密にし、みんなが全体の中で、協力して遊べるようにしむけていかなければなりません。

（倉敷・御国幼稚園）